静岡新聞 2020 年 8 月 15 日 付

# 論壇

## 失われた濃密な時間

学習院大教授（国際経済学） 伊藤 元重

新型コロナウイルスへの対応ということで、多くの大学はいまでもキャンパスを閉じている。私が教える大学でも、書類などの案件で訪れる学生がたまにいるくらいで、キャンパスには人が全くいない状況である。普段であれば部活でにぎやかなグラウンドや体育館も静まりかえっている。

授業の方は全てオンラインとなり、学生はそれなりに課題をこなしている。本格的なオンライン授業に取り組むということで教師の側に力が入っていることもあるのか、以前よりも課題が大変になったという学生もいる。授業の科目をこなすという意味ではキャンパスまで来なくても何とかなるようでもある。それでもキャンパスにきて仲間と会ったり、部活に参加したりするという、大学生なら当たり前の活動が制限されているのはかわいそうだ。

学生とメールでやりとりしていたら、「なぜ東京ディズニーランドには行けるようになったのに、大学のキャンパスには入れないでしょうか」と書いてあった。「ディズニーランドはオンラインが難しいが、大学の授業はオンラインで対応できる面が多いから」、とは答えてみたが、どうもあまり説得性はない。

## 新型コロナと若者世代

昔、ノーベル経済学賞を受賞した米国のある学者が書いていたが、自分は大学院時代に立派な先生に恵まれたが、その先生たちからよりも、同級生から多くのことを学んだという。私にもこれは何となく分かる。仲間がどのように考えているのか、そして何に悩んでいるのか、日々の付き合いの中でそういったやりとりをしたことが、自分の経済学の理解を深めたような気がする。

もちろん、大学院だけでなく、大学でも同じことが言えるのではないだろうか。大学生の時代に教室やサークル活動で知り合った仲間から得ることは非常に大きい。一生つながるような友人をつくることもできるだろうし、卒業後は付き合いがなくなる人たちでも、在学中の生活の中でさまざまな濃密なやりとりがあったはずだ。こうなると、大学は教育の場であると同時に、若者が実社会に出る前の貴重なインキュベーション（ふ化）の場でもある。

### 大きな〝後遺症〟にも

今年大学に入学した若者は、これまでまだ一度も同級生に顔を合わせていないし、部活やサークルにも参加してない。学内の食堂で友人と雑談をする機会もない。そうした状態ですでに半年がたってしまった。

秋以降は少人数講義などで対面の授業が始まるところも少しあるようだが、本格的なキャンパスライフはまだしばらくなさそうだ。少し気を緩めるとすぐに感染が広がる状況である。感染のリスクを覚悟してでも大学に来なければ教育が受けられない、ということでも困るだろう。いろいろ考えてみると、感染拡大のリスクを抑える見通しが出て来ない限り、キャンパスライフの復活はなかなか難しそうだ。

今年大学に入学した世代の人たちは、将来、「コロナ世代」と呼ばれるのかもしれない。この若者たちの将来にどのような影響が出てくるのか分からないが、そうした長期的な展開も考えてみると、コロナの後遺症は相当に大きそうだ。

＊この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。